

【クリムトが描いた作曲家たち】

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第 32 番

1822 年に完成したベートーヴェン最後のピアノ・ソナタで、ルドルフ大公に献呈された。2 楽章構成という珍しい形式だが、終楽章を聴けば、この先は創り得なかったことが納得できるのではないだろうか。第 1 楽章の序奏は、運命的な「ハ短調」で始まり、やがて悲劇的な主題が現れる。第 2 楽章は、1 音 1 音を踏みしめるような主題と 5 つの変奏からなる。魂が浄化されていく過程をたどるように変奏が繰り返され、天国を想わせるトリルが現れて主題を回想したあと、ひっそりと幕が閉じられる。

シューベルトの歌曲

「春に」は 1826 年の作品で、エルンスト・シュルツェの詩による。晴れやかな早春の季節にもかかわらず、失恋の歌である。しかし、過ぎた恋を懐かしむかのように、曲調は穏やか。「死と乙女」は 1817 年の作品で、マティアス・クラウディウスの詩による。死を怖れる乙女と、甘い言葉で彼女を誘う死神との対話になっている。「夜曲」は 1819 年の作品で、友人でもあったヨハン・マイアホーファーの詩による。死を迎える老人を描いており、重々しいピアノ伴奏が鈍くなっていく老人の挙動をイメージさせる。

リスト - ワーグナー：イゾルデの愛の死

1865 年に初演されたワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》は、トリスタン伝説にもとづく悲恋の物語。「トリスタン和音」と呼ばれる半音階的進行が、現代音楽への扉を開いたとも評される。本曲は、その第 3 幕のクライマックスに置かれた劇的なアリアをリストがピアノ用に編曲したもので、オペラの初演からわずか 2 年後の 1867 年に完成した。法悦に満ちた官能的な場面を、余すところなく再現している。

シューベルトの歌曲

「憩いなき恋」は 1815 年の作品で、ゲーテの詩による。憩うことすら許されない、苦しい恋の胸の内を歌う。「セレナーデ」は 1928 年の作品で、シューベルトが死ぬ間際に書いた歌曲をまとめた《白鳥の歌》（全 14 曲）の第 4 曲。ルートヴィヒ・レルシュタープの詩を用いており、おそらくシューベルトの歌曲のなかでも最も知られたメロディのひとつであろう。